

学・会・近・況 セッション企画2

現代南アジアと
英語文学・再考

難波美和子・関口真理・大工原彩・坂田貞二

1 問題提起

現代インドで英語が重要度を増していることは間違いない。英語を活用できることが、社会的成功と密接に結びつき、英語教育への関心も高い。拡大する新中間層は、英語を重視した教育を受け、経済活動や情報獲得の手段として日常的に英語を活用している。このような現在、インドの英語文学がどのような状況にあるのかを検証する時期が来ているのではないだろうか。

本企画は、現代インドの文学に、社会状況や言語などそれぞれの立場から関心を持つ者が集まって立ち上げた。インドの英語文学が評価されるにあたって避けて通れない国外の視点と、インド国内の視点とを交叉させることで、現代の英語文学の状況が見えてくるのではないかと考えた。検証の視点と分担は以下の通りである。1インド国外における「インド系」英語作家の活動とその影響（難波）、2近年のインド人英語作家の活動報告（関口・大工原）、3インドの多様な言語による文学と英語への翻訳活動（坂田）である。それぞれの立場から報告を行い、質疑によって最近のインド社会の変化と英語文学のかかわりを確認した。以下は発表をもとにして、質疑による検討とその後に得た情報を加味したものである。これらのアプローチを手がかりとして、現代インドにおける英語の文学と、諸言語の文学との関係、教育と文学、そして英語文学の中でのインドの可能性についての議論を行うことを、今後の課題として提起したい。

2 コモンウェルス文学、ポストコロニアル文学、それとも英語文学？

周知のように、近年、「インド系英語作家」の活躍は目覚ましい。イ

ギリスやアメリカなど「英語圏」の現代文学において、特に1990年代以降は、南アジアに出自をもつ作家の活動を除外して、現代文学は語れない。南アジアでは、英語で書く作家たちは独立以前から一定の評価を得てきたし、独立以後も数多くの作家たちが活動してきた。しかし、彼らはコモンウェルスの作家として把握される傾向にあり、イギリス文学、アメリカ文学という範疇からはしばしば零れ落ちてきた。それが1990年代以降、英語という開かれた媒体によって、国際的な市場で、作家が自己のアイデンティティを前面に出して登場するようになってきた。彼らはインド系のアメリカ市民であったり、インド人を先祖に持つイギリス市民である。そこではコモンウェルスの枠組みは解体していく。

この変化の背景には、経済のグローバル化による社会の変化とともに、“English Literature”という枠組みの再編成が関わっている。フェミニズムやポストコロニアル批評、カルチュラル・スタディーズなどの影響を受け、1970年代から1980年代にかけて、大学教育としての“English Literature”という枠組みに疑問が呈され、キャンソンの見直し、文学史の書き直しが行われた。結局は“English Literature”に目立った変動は起こらなかったとしても、その過程で「英語で書かれた文学」としての“English Literature”の拡散がみられた。単に「イギリスの文学」を中心として同心円状に広がるのではなく、いくつもの核が有機的につながっている多様な性質をもった集合体である。結果として「文学性」の在り様も問い直し、従来のイギリス的な美意識、文学的「雰囲気」に合致しないものを文学的に評価することを可能にした。このような転換は非ヨーロッパ的な物語性、饒舌性を新しい文学として積極的に歓迎することになった。1970年代後半から1980年代にかけて登場したV・S・ナイポールやS・ルシュディの登場はこうした“English Literature”の動向と切り離して考えることはできないだろう。

彼らは「ポストコロニアルの作家」と呼ばれた。ポストコロニアル批評のスタンスは、そう位置づけられた作家たちにとって歓迎すべきものではなかったが、多声的な語りや口承的な語りを、抑圧された声を呼び覚ますものとして評価する背景となった。その強い「物語性」は「インド系」作家の特徴として認知された。ヨーロッパやアメリカの市場では、ロヒントン・ミストリー、アルンダティ・ロイ、アミタヴ・ゴーシュといった作家の小説は、ポストコロニアル状況下のインドを「真に」「豊

かに」「神話的に」描いたものとして読まれた。世代間の対立やアイデンティティの不安もポストコロニアル状況を現代的に表現したものとして受け入れられた。

しかし、「インド系英語作家」というとき、実際に指示されているのは何者なのだろうか。インドに在住している作家もいれば、長くイギリスやアメリカ、カナダに住んでいる作家もいる。インドで生まれても育ってもしない作家もいる。むしろ、そのような作家こそが「インド英語文学」と呼称されているのであって、インドでインド人の読者に向けて英語で書く作家は、そこに含まれていないようにさえ見える。インドに出自を持ち海外に暮らす作家たちもインドを舞台にしたり、海外に移植されたインド文化を背景にして描く傾向があり、読者（出版社）もそれを期待する。定義のあいまいな“Indianess”（インド性／インドらしさ）がある種の市場価値となっている。そのようなものを想定する作家と送り手の間で、インド系英語作家というくりが成立しているのではないだろうか。

一方、英語の文学がインドの文学となり得ているとするならば、現在それはどのような文学で、作家と読者に何を与えているのだろうか。イギリスやアメリカの市場に評価されるものだけがインドの英語文学ではないはずである。

3 新中間層の英語文学の現状と分析

前提の第1として、英語の文学はインドで広く受容されている。英語はインドの文学言語のひとつと言ってよいだろう。前提の第2としては、英語の文学を受容している層の英語能力は決して均一ではないということである。それは英語を身に着けた環境によって異なる。伝統的高等教育機関で英語のみで教育を受けた層もいれば、教育の一部を英語で受けた人々もいる。インドの諸言語と英語とを混用する場合も、その程度はさまざまである。したがって英語の読者といった場合に、能力に幅のある多様な読者を想定しなくてはならない。英語が読めるからと言って、すべての英語読者が、高度な文学テクストを楽しめるわけでない。

読者の多様性は、作家の多様性にも反映する。1990年代に登場した英語で書く作家たちの多くは、高い英語能力を備えたエリート層だった。彼らの書く英語は、標準的なものであり、その文学作品を現代イギリスの文学として位置づけるのに十分だった。彼らの読者も、伝統的イ

ギリス文学を読むことのできる人々だった。

2000年代以来の変化を見ると、「英語を使うインド人」の内実はさらに多様化している。地方都市の中間層は、必要に応じて英語は使うが、全般にインドの言語で生活が成り立ち、その存在感はむしろ増している。しかし中間層のライフスタイルと感性を持つ（あるいは持つことを望む）彼らには、トレンドカルチャーへの強い要求とそれを購う経済力がある。これまでインドでは原書のまま流通してきた英米作家やインド人作家の人気作がインド諸言語に訳されるという新しい傾向が加速している。これは英語を使う人、インドの諸言語を使う人の間のすみわけが崩れてきたことを示している。それに従ってそれぞれの言語文学の違いや特色は失われていくかもしれない。またこのような傾向は今後、文学以外の文化事象にも及んでいくことだろう。

このような背景のもとに新たに登場した若い作家たちは、国際的な市場を目指す者もいれば、インドの国内市場を重視するものもある。彼らの作品はサークル内で流通するものもあるが、*First Proof*や*Civil Lines*といった文芸誌によってより広く読者を獲得することもある。

もう一つ重要なことは、読者層の出身地域や社会背景の広がりだが、文学に求めるものを変化させたことだ。文学は教養や読者のエリート性を示す小道具である一方で、娯楽であることが避けられないものとなった。手軽に楽しめ、日常的な言語で表現されている作品が英語文学にも明瞭に登場した。

このような新しい英語文学の在り方を端的に表している作家がChetan Bhagatだろう。彼は2004年*Five Point Someone*で登場し、生業を確保しつつ、コンスタントに作品を発表している。Bhagatが描いたのは、新中間層に参入しようとする若者たちがprivate / publicな生活において直面する問題であり、同じような世代にとって、自分たちを代弁するものとして支持を受けた。ここでは、作家と読者が同じ階層に属しているのである。

そのほかに文学の多様性の現われは、グラフィックノヴェルの登場にも見ることができる。ヨーロッパやアメリカのグラフィックノヴェルの様式を利用した新しい表現が試みられている。

4 南アジアの多数の言葉で創られる豊かな文学を南アジアの人たちと共有するために一英訳、諸民族間の翻訳を進める個人と組織一

南アジアの多数の言葉で書かれた文学を人々が共有するためには、翻訳という手段が欠かせない。また、南アジアの文学を海外に発信したり、海外の文学を南アジアに紹介するにも、翻訳という作業は不可欠である。南アジアに暮らし、あるいはルーツを持って英語で書く作家たちもいるが、南アジアの諸言語による文学を相互に翻訳したり、英語に翻訳することは、南アジアの文学を豊かにすることに役立つだろう。そのような立場から行われている活動を紹介したい。

南アジアの諸言語による文学作品を英語に翻訳することには作家や出版社が積極的に関与している。ヒンディー語作家のサーラ・ラーエやジャーナリストのクシュワント・シンは短編の英訳選集を編纂している¹。

他にも、バンガラ・デシュの作家のベンガル語作品の英訳として、Penguin Booksはタスリマ・ナスリーンの『恥 *Lajja*』を出版し²、Orient Longmanは、ヒンディー語小説『マハー・ボージュ』の英訳を出版している³。

南アジアの文学を研究し、文学作品を英語や民族語相互に翻訳することを推奨・推進する組織としては、1954年創立の国立Sahitya Akademi（文学アカデミー）がある。23のインドの言語と英語による文学を振興させる組織であり、ワークショップやセミナーで研究活動を行うとともに、その成果や諸文学作品の出版もしている。出版活動には、セミナーでの研究報告や、インドの諸文学のサーヴェイとアンソロジーの編纂がある。また毎年アカデミー賞受賞作品をインドの多くの言語で翻訳出版することを推奨している。詳しい活動はホームページで閲覧することができる⁴。

さらに1957年にインド政府によって創立された独立機関National Book Trust, Indiaは、インドの21の主要言語およびゴンディーやサンターリーなど少数部族の7言語で、現代インド文学シリーズや幼少年向けの本を出版している⁵。この組織の活動で注目すべきは、インドのある言語で書かれた小説・短編を他の言語に翻訳・出版するAadan Pradan（受けとり渡す、の意）と、各地の民間伝承のシリーズを刊行していることである。

1988年には、識字教育・読書指導・地域振興・出版などを目的とする

NPO 法人Kathā (カター=お話) が創立された。カターによる出版活動は多様で、南アジアの諸言語を英語で読むことのできる作品集が複数編纂されている。その中には翻訳コンテストの入賞作品や、パキスタンの作家がウルドゥー語で書いた地域・宗教に起因する対立・抑圧の諸相を描いた短編集も含まれる。

このように、南アジアの文学を研究し、文学作品を英語や民族語相互に翻訳することを推奨・推進する三つの組織 (Sahitya Akademi; National Book Trust, India; Kathā) の活動と出版物を概観してつぎのことが確認される。

(1) 多数の言語による文学作品は、英訳や民族語相互の翻訳で他言語の人にも届け、豊かな文学を南アジアの人たちが共有する途が拓かれつつある。

(2) 刊行物の多くは初刷が大多数であることからこの途はさが厳しいようだ。

5 まとめに代えて

現状として、南アジアの文学が英語を含む多数の言語間の交流をもちつつ、英語を媒介にして外部への発信を試みていることが確認される。それらが市場原理によって困難に直面していることも確かである。それでも南アジアの文学の中で英語が果たしている役割は重要だと言えるだろう。英語がエリート層の独占物ではなくなりつつあることも、文学の在り方に影響を与えていると考えられる。

依然として「英語圏文学」という市場においては、インド系英語作家の、インド人にとっても外国人にとっても漠然と存在する “Indianess” が市場価値をもっている。英語で書くことはこうした広い外部の読者層を意識することでもある。その一方で、現在のインドの若者たちを代弁する文学が英語で書かれ、受容されている。そこでは、作家と読者との距離だけではなく、描かれた人物と読者との距離が近くなっている。かつては文学に書かれた人々が自分たちの物語として作品を読むことはなかったが、現在では、まさに自分たちが描かれているからこそ読む、という状況が現われてきている。だからこそ、英語だけでは表現が成り立たず、南アジア的な多言語状況が文学を構成する。日常の言語としての混交英語が文学の言語としての可能性をもっているかもしれない。

Suman Guptaは現代のインド英語小説を文芸英語小説(Indian Literary Fiction)と大衆英語小説(Indian Commercial Fiction)という二つに分類してみせた⁶。さらに文芸小説は、インド国外で高い評価を受け、英文学評論の対象となることの多い作家・作品と、ほぼインドの中でだけ受容され、国内での知名度、人気は前者よりも大きな作家・作品とに分けることができるのではないだろうか。

その一方で、英語で書くことには、依然として英語が他者の言語であることに意味があるのではないか、という指摘にも注意を払うべきだろう。たとえば女性作家にとって、性や暴力を描き出すことは、現在でも母語では困難であり、英語という距離を持った言語よることで、より直接的に描くことが可能になっていると考えられる。どのような英語で書くか、ということが、作品のテーマや読者との関係を示すものになっているかもしれない。

インドの英語文学に描かれた社会の状況は、きわめて現代的な問題を反映しているが、これまで社会分析に十分に活用されることはなかった。社会と文学とを交差的に分析し、批評する言説が必要になっている。

註

- 1 Rai, Sara (ed., tr.), 2003, *Hindi Handpicked Fictions*, New Delhi: Katha.
2003, *Khushvant Singh Selects Best Indian Short Stories*, Vol. I, New Delhi: Harper Collins.
- 2 Nasrin, Taslima (tr. Tatal Gupta), 1994, *Lajja/Shame*, New Delhi: Penguin Books.
- 3 Mannu Bhandari (tr. Ruth Vanita), 2002, *The Great Feast*, New Delhi: Orient Longman.
- 4 <http://www.sahitya-akademi.gov.in>
- 5 <http://www.nbtindia.org.in>
- 6 Suman Gupta, 2012, "Indian 'Commercial' Fiction in English, the Publishing Industry, and Youth Culture", *Economic & Political Weekly*, Vol. XLVII, No. 5, 46-53.

なんば みわこ ●熊本県立大学文学部教授
 せきぐち まり ●亜細亜大学非常勤講師
 だいくはら あや ●外務省南西アジア課
 さかた ていじ ●拓殖大学名誉教授